

## 私も誰かの役に立ちたい

中学三年 瀬上 克貴

小学一年生の夏、私は学校に通うことができなくなりました。学校での滞在時間が減っていく中、担任の先生から「通級」を紹介してもらいました。そこにも通うことができなくなってしまい、家から一歩も出ない生活を送りました。

その時、市役所の保健師さんが私の遊び相手になって一緒にリビングでバドミントンをしてくださいだった記憶があります。その時に放課後デイサービスを教えていただき、まずは担当者の方と話をすることから始めました。家でホットケーキを焼いてみようか？との提案に乗り、レシピを読んで、牛乳も測り卵も割り、口頭での助けはありましたが、自力で焼き上げることができました。その時に、私もやればできるかもという微かな自信が湧いてきました。

その後、登校できたり不登校になったりを繰り返す生活を送っていました。小学校での私の目標は『卒業式に出席して名前を呼ばれたら』「はい」と返事をする『でした。

そんな中、今までとは校区も違う中学校に通う事を選びました。友達にはできるのか。そもそも電車に乗って学校に通うことはできるの

か。勉強についていくことはできるのか。様々な不安が脳裏をよぎりました。

二週間の休校の後、小学校の卒業式が行われました。短縮バージョンで一人ひとりが壇上で卒業証書を頂く事は叶いませんでしたが、無事「はい」と返事もできて目標を達成できました。その安堵感の中で次なる目標が出てきました。中学校に通うことです。

私の不安をよそに、コロナ禍で入学式は中止となり、オンラインでの授業がすぐに始まりました。対面で会うよりかは、家にいて画面越しでの授業でしたので、ストレスは少なかったと感じています。

学校へ行く事に関しては、一週間に一度の登校から始まったので少しずつ慣れていく事ができました。小学校の時にソーシャルスキルも学んだので何かあっても大丈夫と自分を信じる事ができました。そして不登校にはもうならないぞと覚悟を決めました。

私の視覚優位という特性上、口頭での内容は頭に残ることなく消えてしまいます。その事を自覚しつつも、なかなか友達にも頼ることができませんでした。でも、「苦手なことだから、教えてほしい」と頼むと、快諾してもらえました。

私は、学校へ通うという事に関しても様々な業種の人たちに助け

ていただきました。そのおかげで、今日学校に通うことができま  
す。家族をはじめ、学校・福祉施設・塾の先生。沢山の友達が私の助  
けになってくれています。この「縁に感謝しつつ私と同じ」「不登校」  
で悩む人たちの心の支えになれるような活動をしていきたいと思っ  
ております。